

日本語を愛するひと

伊藤 亜紀

ツベタナ先生は、いつも忙しい。

絶えず多くの修論や博論の審査を抱え（日本文化に少しでも関わるテーマであれば、すべて先生に依頼がやってくる）、学生の試問に駆り出されながらも、日々の授業の課題を、寸暇を惜しんでチェックする。一人一人のレポートに丁寧に目を通し、わずかな言葉遣いのミスまでをも指摘する。段落の始まりが一字下げられていないと言つて怒る。正確な日本語を求める気持ちは、おそらくこの大学の誰よりも強い。

むろん日本語だけではない。母国語であるブルガリア語、学生時代に使っていたロシア語、英語——その他にも多くの言語を操る。まるでスイッチのように、会う人によって自在に言語を切り替える脳内構造がいったいどうなっているのか、英語ひとつにさえ手こずり続けている自分などには、まったく想像もつかない。

大著『涙の詩学』（二〇〇一年、名古屋大学出版会）、そして『心づくしの日本語 和歌でよむ古代の思想』（二〇

一一年、ちくま新書）等で、日本人に和歌の魅力を再認識させる一方で、『とはすがたり』や『枕草子』をブルガリア語に訳し、日本文化を母国に紹介する。ツベタナ先生の研究人生とは、まさに両国の架け橋そのものである。

二〇〇三年に先生が人文科学科（現・人文科学デパートメント）のメンバーに加わられたとき、学科内の雰囲気が目に見えて活気づいた。誰にでも気さくに声をかけ（遠距離通勤の私は、よく車に乗せていただいたが、先生は校門の前で必ず一時停車し、守衛さんに陽気に挨拶するのが常だった）、明るく世間話に興じるツベタナ先生が入られたことで、会議は随分と賑やかになった。学生たちも、先生の快活さ、古代・中世文学の熱い語りや広範な知識に惹かれて集まり、授業は常時満員御礼だった。一方、大学院の授業は、世界各国から訪れる学生で溢れ、先生はさまざまな言語を用いて彼らに対応していた。学食やラウンジでは、ゼミ生たちと活発に意見を交わす先生の姿をよく見かけたものである。院生の多くは、教員や研究者として巣立っていった。

そんな先生の最大の功績は、「卒論を日本語で書く」のを大学に認めさせたことであると私は思う。先生が着任される以前は、人文科学科の学生は、どのような論文テーマであれ、原則として全員英語で書かねばならなかった。もともとと言えば、全学的に英語での執筆が推奨されてきたものの、時代の流れのなかで、他学科はしだいに日本語による執筆を許容するようになったのだという。しかし人文科学科は、「自分の研究内容を英語で発信する」必要性を主張し、この伝統を守り続けていた。それに風穴を開けたのが、ツベタナ先生である。

本学の基本的な教育方針に、「日英両語で学び、世界の人々と対話できる言語運用能力」を身につけさせるというのがある。しかしグローバルな対話を重視すれば、どうしても英語の習得により力を入れざるを得ず、日本語の文章力を磨くことは二の次となる。近年は本学に限らず、英語開講の授業が急増する一方で、学生の日本語力は着々

と低下しており、その危険性をきちんと指摘する者もない。日本人以上に日本語を愛するツベタナ先生は、このことを特に憂えた教員のひとりであり、公の場でも臆せず英語教育偏重の弊害を訴えた。多言語に通じた先生の言葉だからこそ、説得力があった。

教育者としては厳しかったツベタナ先生だが、私にはいつも優しく、まるで娘であるかのように接してくださいました。五〇も超えた人間を「亜紀ちゃん」と呼んでくれる先生など、他にはいない。人文科学科の学生たちとリゾートで訪れた鎌倉や葉山、山中湖では、深夜まで大学の行末について語りあった。

二〇二〇年春、我々は突然他者との交流を絶たれ、職場に行くことさえまもなくなくなった。ツベタナ先生の長年の労をねぎらうべく企画が進んでいた最終講義やお別れ会も、すべてお流れとなった。ひたすら自宅で一人パソコンと向き合う日々を送っていると、教室に向かう途中でさまざま先生と言葉を交わしたことが無性に懐かしくなる。とりわけ香水の匂いを漂わせ、青緑の大きなスカートを翻しつつ廊下を闊歩し、行きあう学生や教員に次々と声をかけていく先生の姿は、今も目に焼きついている。お酒とお菓子とお喋りが大好きなあの先生は、この閉塞感に満ちた日々を、いったいどのように過ごしていらつしやることだろうか。